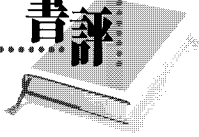


書評



市川宏伸, 海老島宏 編

臨床家が知っておきたい

「子どもの精神科」(第2版)

こころの問題と精神症状の理解のために

牛島定信

子ども問題に接したときの支えとなる書

この数年のことであろうか、「広汎性発達障害」「注意欠陥多動性障害」はお茶の間でよく普通に使用される病名になった感がある。子どもの精神医学的問題はその数といい、質といい、ますます深刻の度合いを増しているが、上記の2つはその代表的疾患といってよい。加えて、子どもの精神疾患のカバーする領域の広いことも忘れてはならないだろう。小児科のみならず、教育現場をも直撃しているし、児童相談所をはじめとした地域の生活まで巻き込んでいる。さらには、上記の疾患が成人後になって発見されることが判明してから、成人の精神医学までも震撼とさせている。そして、衝撃の強さ、拡がりの大きさ、あるいは速さは関係領域に少なからざる混乱を招き、厚労省まで動かしたほどである。成人を対象とした一般の精神科医、小児科医、児童関連の仕事に従事する人たちの勉強不足を露呈させてしまった感があるのである。

本書『臨床家が知っておきたい「子どもの精神科」』の初版は8年前に上梓されてよく読まれたようであるが、上記のような疾病構造の急速な変化に対応する目的で、このたび、新版(第2版)が出版されることになったという。ここ10年ばかりの臨床経験を踏まえて、児童精神医学の臨床、専門家養成、研究の面でわが国のリーダーシップをとってきた東京都立梅ヶ丘病院(2010年3月に、府中キャンパスに他の小児病院をも統合して、東京都立小児総合医療センターとして発足した)の関係者を中心に、

新しい編者と執筆陣を得ての仕事である。子どもの精神科で具体的にどのような対応がなされているのか、細やかな説明はなんらかのかたちで、これから子どもの精神科とかかわりを持とうとする人たちに限らない安心を与えるに違いない。

とはいえ、本書はそうした狭い領域だけに焦点を当てているわけではないことを力説しておきたいと思う。子どもの示す症状、問題行動の多様さは2~3の疾患に限って説明してもほとんど意味をなさないのである。その点、よく考慮されていて、すべての症状を中心にした説明があり、すべての精神疾患の解説があって、非常に使い勝手がよくなっていることを述べておきたい。多岐にわたる精神疾患の全体を見渡したうえでの重要疾患の位置付けがきちんとなされているのである。

手にとって感じることは、小児科や精神科のクリニックに、あるいは教育現場ないしは子どもの福祉機関の相談業務の現場で、必携の書となることは間違いないという思いである。文章の読みやすさ、ボリュームの手ごろさ、そして内容が中立的なことは、子ども問題に接したときに感じるちょっとした支えのほしさを十分に満たしてくれるだろう。詳しい勉強が必要になったとき、次のステップも準備してくれている書でもある。

(日本児童青年精神医学会元理事長)

●A5 304頁 2010 定価3,360円(本体3,200円+税) 医学書院